

井伊家伝来

井伊家の甲冑

彦根藩の藩主としての井伊家の地位は、安土桃山時代（1568～1603年）およびその後の数十年間の多くの戦いでの突出した戦功によるものである。1582年から、井伊直政（1561～1602）は、徳川家康（1543～1616）の強力な突撃軍として、「赤備え」と呼ばれる赤い甲冑を身にまとった部隊を率いた。いくつかの注目すべき例外を除いて、江戸時代（1603～1867）には大規模な軍事紛争はなかった。彦根城自体は一度も戦場にはならなかった。それでもなお、井伊家の金の紋章が飾られた赤い甲冑は何世紀にも渡って彦根城に保管されてきた。

彦根城博物館には、井伊家藩主そしてそのほかの井伊家の人々のために作られた25領の甲冑が収集されている。井伊家の家紋のついた甲冑は朱色の漆で仕上げられている。少数の一族や家臣の兜には小さな前立てしか付いていなかったが、藩主の兜は空を貫くような金色の前立ての天衝脇立（“空を貫く側面のとさかのような飾り立て”の意）で飾られていた。時代とともに付属品はより装飾的に、そしてより華やかになった。戦争の方法が進化するにつれて、武士の甲冑も進化した。1543年にもたらされた火縄銃に始まり、鉄板で作られた当世具足が、鉄、もしくは革を組み合わせで作られた伝統的な鎧に取って代わり始めた。このタイプの鉄鎧は、27キログラム以上の重さがあった。平時でさえ、甲冑は戦士階級の象徴であり、藩主とその息子たちのための甲冑は細心の注意が払われ、芸術性を兼ね備えて制作された。

戦場の家紋

戦闘がしばしば2人または3人の個別展開になった混乱の中で、敵か味方かをすばやく識別できることは必要不可欠であった。指揮官は、彼らに付随する大きな旗によって明確に区別できたが、遠くにいる個々の武士を識別することは、はるかに困難であった。これは、特に戦功に対する認識を得ることが、誇り以上の問題であると考えられた。武士たちはこの戦功に応じて、財産、金、または領主という形で褒賞を受けたからであった。このため、井伊軍の各武士は戦場の目印として、それぞれの名前が書かれた旗指物を身に着けた。井伊家の紋章は赤地に金色で飾られていた。